

## 松山尋常小学校時代の想出記

昭和34年(1901年)7月 竹中 七輔  
(65歳)

明治三十四年(1901年)四月一日指折り数えて待つて居た入学式に出ると云う喜びを胸に懐いて祖母の心をこめて作って呉れた緋の袴と羽織りに縦縞の袴を付けてもらって、姉ヨシに連れられて登校と出かけた。途中友朋上村仁介君や其他新入生等と手を取り合って校門附近に至り門前の板橋をカタカタ音を立てながら威勢よく校門を潜って玖珂郡横山村立松山尋常小学校に登校した。校庭には既に何十人かの先輩生徒や新入生等が物珍らしてうに顔を見合せたり又片すみの方では親の手に縋り泣いて居る者も居た。漸らくするとカンカンと時報の半鐘が鳴ると約七、八十名の在校生が整列する、その脇に新入生も母姉に連れられて乱れ勝の整列をした。

筆者は在校生の姉と一緒に登校したので指導者が無く一人で列に加わり点呼もすむ上級生から二階の式場に入る。新入生は一番後に母姉連れて入場した。横道先生のキモイリで式場は整理せられ、熊谷諭校長の式辞、横道先生の訓詞等があつて入学式は終了、階下に長い一列の机の上に、二十糎角程度の自紙の上に亀形の菓子が二つ宛おいてある。是れを全校生徒が頂戴するのである。此の御菓子は毎年の三大式日を始め挙式後の祝品として全員配附されたのであるが、是れが菓子も少ない其当時の児童には此上もない有難い贈物の一つであつた。入学当日先輩の中で一番印象的であつたのは、河本富重君が親切に僕等入学生に対し整列のし方や時報の事、入室の時は傘は此所にこうして置く事、下駄は此所にこうして整屯しておくのだ、便所の使用は斯くするのだと親切に指導して下さった友愛行為は六十年後の今尚忘れる事の出来ぬ有難さに感謝している。此頃の先生は校長熊谷諭先生、教頭横道孫七先生の二人であつたがイタズラの僕等には横道先生の方が余程恐ろしかった。二年生になると 井上槌太郎校長、三年の時は亀井由介校長、四年の時は瀧羨校長と在校生四年の間に四人の校長につかえた事も亦外では見られない大きな変遷であつたが其の原因が那邊にあつたかは当時少年の僕等には知る由もないが在校生約百名も父兄も少々不安を感じていた様に思う。筆者も少年乍らに心細さ感じて居た。

校地は、平田川に架った橋を渡り松山の下に位し朝日は遅く夕日は照り付け校地としては些か不適地と云えるであろう。校地の中に穀倉庫と教員住宅があつて前庭後庭の二つに分断せられ使用には極めて不便であつた。然し其頃は体育祭と云つた様な事はなく体操も徒手体操が週一回あるかないかと云う程度で運動といえば鬼ゴッコ、陣取り、パッチー、陰れゴッコ、手毬つき、コボイシ取り、ヤサラ遊び、其他で集団行動は少ないので狭い二つの運動場でも不便ながら何とかすんで居たが一番困つて居たのは、校内に入ると校庭の最中に大きな松の本のあつた事であつた。前述の様に陣取りという遊びをするには大変調法な存在であつたが全員整列などと云う時は此の松の木は何時も邪魔物の様な感じのする代物であつた。

此の外に小さい桧が一本と校舎のすぐ前に草巻とかハイの木とか云う樹もあつた。校舎の後方には桐の木が二三本あつて時々伐材されて校長先生等の下駄を作るのには便利

であった。校庭の外柵はコンクリート壁や板垣でなく概ね杉垣で囲まれて居た。此の杉には大変大きな蚊(足の長さが四糎(4センチの意味)もある)がいて是を女子の首等に入れて女子を困らせ先生より罰を蒙る連中も時々見受けられた。校庭に在った樹木の中で松桧の外に校門を入った真正面の突当りに球形で誠に其形状もよく花盛りには真紅の色を見せ美観を呈した海どう樹のあった事である(此の木は現在平田小学校の玄関前に移植されて今尚学校の景観に一異彩を放っている)。此の大樹の下でも夏の暑さに涼を求めて少女達が腰をおろして居る風景も思い出の一つである。

校舎は校庭の北方に南向きの木造二階建であった(平面図参照)。階下が一、二年生の教室、階上が三、四年生の教室で、何れも複式教授であった。二階は講堂兼用で、式の当日は机、腰掛を一隅に片付けて挙式をされると云う極めて簡明な仕組であった。階下の教室は南向きとは云うものの南側に大きい廊下(縁側)があるので廊下の庇の屋根が極めて低いので折角南の自然光線も教室には何の恩恵も無く教室は極めて暗く二年生の教室は昼尚暗き当今の様に新聞や雑誌は到底読む事は困難である。然し幸に五、六十年昔の一、二年生の教科書は其の文字が大変大文字なので幸して教育には先づ先づと云う程度であった。勿論其の当時は硝子と云う物は非常な貴重品であったから教室の出入口も二階の中連採光窓も緒紙の紙貼障子で建てられ其外側に雨戸を建て外雨を防ぐという様な仕組になっていた。教員室は階下の山手側に六帖程度のものがあつたが二人の先生の机、腰掛と学籍簿や教鞭道具、教材等も置く室としては極めて狭く郡視学さんや其他来客があると先生方も大変困っていられた様に思われて居た。湯沸場も山手の方にあつたが部屋中は真暗で壁柱、天井等煙と煤で真黒になって流しも水溜も何かおちていても到底知る事は出来ない程度で流しの周辺にはイーゴと油虫は何時でも取る事が出来た。便所は西北の角にあつたが隔壁もなく大溝式で小便のはね返りを防ぐため何時も杉の葉が一ぱい入れてあつた。用便を急ぐ小学生が一度に押かけ後から押されたら前の大溝に落ちるおそれがあるので、先生も上級生も用便上の注意には一苦労されたと思う。

時報をするのに一つの振り子無しの八角時計があつたが、此時計は平田地区内でも有名な時計であつて区内何処の家にも在ると云う代物ではなかつた。学校建築当時時計を買う為の有志の協議が数回開かれて論議され集会も七、八回開かれたと云う事である。今其時計の行き先が知りたいものである。授業の開始も時限の報知も終業の合図も此時計を見ては四年生の級長か副級長等が鐘を叩いて会図をするのであつた。筆者も四、五回叩かしてもらつた事を覚えている。其の叩き方にも一定の規定があつて先づ内側を交互に数度連続し其後に外側の紋のある処をカンカ ンカンと三度叩くのであつた。教科は修身、国語(読方、書方)、算術の三課目時々体操等であつた。此の外女子は裁縫で一つ身。中庭にあつた困穀米倉庫には数百俵の米が貯蔵してあつて是を端境期に米を必要とする者が一俵又は二俵と希望数を借り入れ新米が出来た時借りた米一俵につき二升の利子を附して返納し又来年の災害又は不作に備えて置くのである、此の制度は旧藩制の時よりの遺物であつたが当時平田外には今津川西等にも有つた様に聞いていた。其後明治四十四、五年頃廃止となつたが今頃考えて見ると昔の人は非常に用心深い事でもあり又経済範囲が狭かつた事がわかるのである。此の外野山と云つて部落共有の林野があつて冬期山の無い人や薪の不自由な者が入山料を支払つて薪取りをする制度も

あつて我々にも少年時代に数回入山して薪取りをした事も思い出の一つである。

(編者注 困穀倉及区有林については別項記載を参照せられたい。)

斯様な状況で尋常小学校の四年間を終り、明治三十八年二月卒業式があり、明治三十八年四月一日岩国町と横山村と合併し大岩国町が生まれた、当日大きな夢を見つゝ三階建ての鐘突堂のある玖珂郡岩国町立岩国高等小学校第一学年に入学した。顧みれば五十七年前松山尋常小学校に入学した当時男子一〇名女子一六名の諸兄弟も今尚健在で平田在郷の同輩では河村鶴一君、重宗舛造君、川西に居られる平中与三君、海土路に在す岡進一君、と女子の方では平田に居られる方は金本トナさん一人で其他は他郷に居られ安否を気遣って居る。

中でも故人となられた友朋や恩師及先輩の御冥福を心かお祈りして稿を封す。

明治27年(1894年)10月25日生まれ)